

文部科学省「読書活動推進事業」

# 令和7年度 研究報告書



金沢大学人間社会学域学校教育学類附属特別支援学校

#### ◇ 研究の背景（主題「Society5.0 を豊かに生きる 資質・能力の育成」について）

社会の現状や変化への対応と今後の展望として「第4期教育振興基本計画」（文部科学省,2023）では「将来の予測が困難な時代において、未来に向けて自らが社会の創り手となり、課題解決などを通じて、持続可能な社会を維持・発展させていくことが求められる。」と示されている。文部科学省のみならず、経済産業省や内閣府からも新たな教育改革構想が提起されており、正解のない問題に対応して納得解を探ることに止まらず、変化を積極的に促進する方向性が見て取れる。

金沢大学附属特別支援学校を含む本学附属学校園においても共通テーマとして「Society 5.0 を豊かに生きる資質・能力の育成」を掲げ、新たな時代を切り拓く人材育成に向けた取組を進めている。そして、附属学校園将来構想<金沢モデル>の具体的なアクションプランとして、企業や行政と連携しながら令和時代の新たな教育モデルを提唱すべく、本校においてもこれまでの研究の知見を活かした教育活動を展開している。

「Society 5.0 を豊かに生きる資質・能力」は本校では教育目標にある「その子らしく精一杯生きる力」と捉え、豊かな生活を送るために必要な幅広い力に目を向けた取組が、本校児童生徒の力を高めることにつながると考え、研究主題として設定した。

#### ◇ 研究の重点（副題「読書活動の推進を通して」について）

これまで本校で取り組んできた研究では、言葉によって物事を認識し思考すること、そして言葉を介して他者とつながることの重要性と、その力を育成するための具体的な教育課程についての提案を行った。今年度は言葉がもつ働きに着目した研究を継続しつつ、豊かな生活に必要な幅広い力に目を向けていくための取組の1つとして「読書活動の充実」に重点を置き、推進していくことにした。

文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力」（2004）によると、読書の重要性について「読書により我々は、楽しく、知識が付き、ものを考えることができる。（中略）一生の財産として生きる力ともなり、楽しみの基ともなるものである。」と示されている。そして、「第五次『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』」（文部科学省,2023）においては「多様な子どもたちの読書機会の確保」「子どもの視点に立った読書活動の推進」として、特別支援学校学習指導要領（解説）（文部科学省,2018）においては「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、（中略）児童又は生徒の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。」として具体的な取組を求めている。

このことから、変わりゆく時代の中であっても児童生徒自身が自らの価値観や見方・考え方を更新し続けていくことを期待し、本校では読書の目的である「趣味としての楽しみ」「知識を得ること」のよさに児童生徒が気付くことを促していくことにした。

#### ◇ 研究の目的

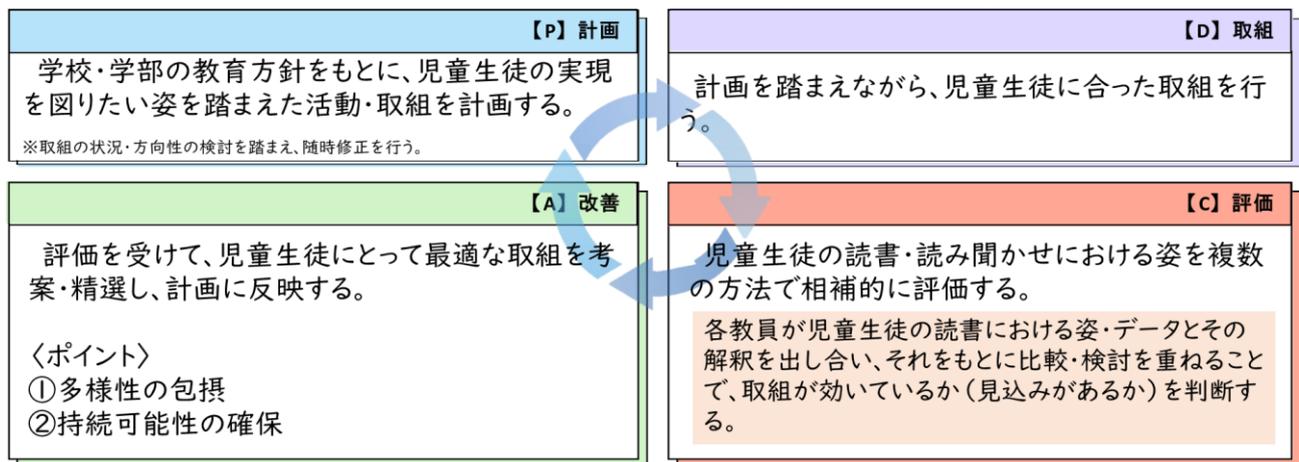
- 1 すべての児童生徒が読書による文字・活字文化の恩恵を受けられるよう、一人ひとりにとって適した取組の推進とその効果を明らかにする。
- 2 知的障害がある児童生徒の本への親しみを明らかにする評価モデルの開発・提案を行う。

## ◇ 研究の内容

- 1 多様な評価方法を用いて知的障害のある児童生徒への効果的な読書（読み聞かせを含む。以下同様）の取組を整理する。
- 2 効果的な読書活動を支える指導計画や支援の方法について整理する。

## ◇ 研究の方法

読書を通して児童生徒の「楽しみたい」「知りたい」という気持ちを支えるために、PDCAサイクルに沿って読書活動の推進を行った。研究では各学部で選定した児童生徒をモデルケースとしてPDCAサイクルを循環させた。PDCAサイクルは周期が長いと改善が次につながりにくいとされているため、本取組では年間を通して繰り返し循環させ、実践を根拠に読書推進計画の更新を図った。



### 【P】読書活動推進計画の作成

「特別支援学校の指導内容・方法の充実に向けて」（東京都教育庁,2021）を参考に、学校図書館の整備と読書活動の充実に向けた「金沢大学附属特別支援学校読書活動推進計画」（右二次元コード参照）を作成し、その計画を踏まえて取り組んだ。

### 【D】読書活動の推進

読書において実現したい姿をもとに、読書活動を行った。（詳細は各部頁参照）

### 【C】読書活動の評価

読書の効果を検証する方法として従来から観察法などの定性的なものを中心に行われてきているが、知的障害のある児童生徒（特に、表出の見取りが難しい児童生徒）が本に親しみをもっているのか、関心を示しているのかを把握しきれていない可能性がある。そこで、評価方法として①行動観察（教師の見取り）に加え、②身体動作の観察、③脈波の計測を行い、それらのデータを重ね合わせながら効果の検証を行った（詳細は次頁参照）。

### 【A】指導計画の改善

①多様性の包摂と②持続可能性の視点から活動を精選し、活動の改善を継続的に行った。

#### 【参考文献】

- ・東京都教育庁指導部特別支援教育指導課（2021）平成29年度～令和2年度東京都特別支援教育推進計画（第二期）・第一次実施計画に基づく特別支援学校における特別支援教育の充実事業指導資料「特別支援学校の指導内容・方法の充実に向けて」.94-95.
- ・文化審議会答申（2004）これからの時代に求められる国語力について.20.
- ・文部科学省(2018)特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（幼稚部・小学部・中学部）.267-268.
- ・文部科学省(2023)第4期教育振興基本計画.8.
- ・文部科学省(2023)第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」.8-9.

## 取組の評価方法

評価の目的は、教育実践の担い手である教師が、学習状況の評価を通して教育の成果が上がっているかどうかを確認し、実践を向上させることにあるとされている（西岡,2015）。そして、児童生徒一人ひとりの理解にあたっては、多面的な性質をもっている教育の効果を、その特性に応じた評価方法が必要になる。

本研究で行った「読書」については特別支援学校学習指導要領国語科「学びに向かう力、人間性等」の目標に示されており、児童生徒が読書の意義や価値を実感しているかが重要であると考えた。そこで、以下3つの方法を用いて児童生徒の学習状況を把握し、取組の工夫・改善を図ることを試みた。

### I 行動観察（教師の見取り）

#### ○ エピソード記録

日々の読書の様子や動画を振り返りながら、児童生徒の様子を【事実】と【解釈】に分けて記録をとった。教師が異なる背景（価値観・児童生徒観・発達観・経験など）をもっていることを前提に、対象児童生徒への関わりを積み重ね、児童生徒に現れてきた変化（事実）や各教師の見方（解釈）を重ね合わせた。学部研究会においては、その過程を繰り返すことを通して、児童生徒への見方をよりの確なものにし、取組の改善につなげた。

### II 身体情報（金沢大学人間社会研究域「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会 承認番号 2025-12）

知的障害のある児童生徒を対象にした研究においては言語的応答（質問紙調査・聞き取り調査）への困難性があることもあるため、実態把握や学習評価に必要な情報を生理的反応から得ることがある（吉岡,2023）。本研究では、脈波の計測データをもとに個人の状態を把握する「健康経営支援サーブス」（NTTPC コミュニケーションズ）を活用し自律神経の働きから読書時の状況を捉えるとともに、身体動作の情報から読書への集中度合いを把握し、児童生徒にとって最適な取組・指導方法を見出すことを試みた。

#### ① 身体動作の観察

集中時の姿勢や動作には特徴があるため、姿勢・動作が集中度合いや興味・関心の度合いを予測できる程度の情報を持つことが示唆されている（布山・日高,2016）。そこで、本研究においては日々の読書の様子や動画を振り返りながら、布山・日高(2016)で示された項目（右の表参照）にしたがって児童生徒の姿勢・動作を記録し、読書に対する集中状態や興味・関心の高まりの評価を行った。

表1 身体動作の記録

右手動作	頬杖・身体（ ）を触る・リズムをとる 肘掛・その他（ ）
左手動作	頬杖・身体（ ）を触る・リズムをとる 肘掛・その他（ ）
姿勢変化	前のめり・傾きなし・椅子の向きを変える 座り直す・その他（ ）
足の位置の変化	足組み・貧乏ゆすり・両足全接地・ つま先接地・その他（ ）
本の状態	立てかける・持ち上げる・前の頁に戻る・ 中断・その他（ ）
感情が現れている身体的変化(表情など)	笑う・微笑む・泣く・平常・ 眉間にしわ・その他（ ）

表2 集中度合いの評価

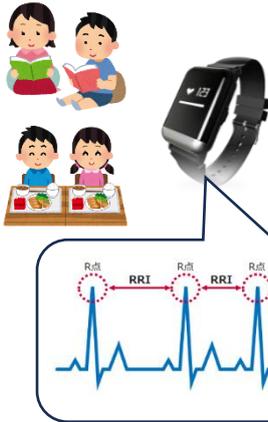
読書の様子 (記録者視点)	集中度(低)← どちらともいえない →集中度(高)
	細かい動きが増える← →静止・前傾姿勢が増える

【身体動作記録項目】

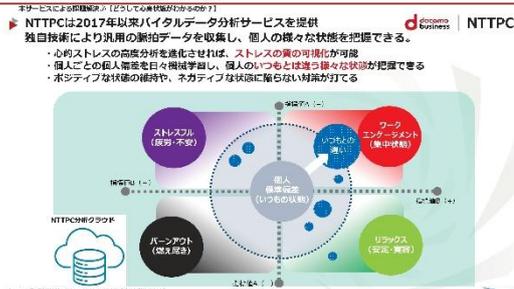
#### ② 脈波の計測・分析

高い集中とパフォーマンスを伴う状態は課題の難易度や行為者の心的負荷が反映される生理指標から推定できると考えられている。そこで本研究においては脈波のゆらぎ(RRI)を計測し、交感神経/副交感神経の状態を指標化することで、児童生徒の心的状態の把握を行った。

## 1 脈波の計測



## 2 脈波の計測データの収集



【出典】NTTPC コミュニケーションズ(2025)

※各指標の算出方法

【指標値 A】交感神経活動指標：(交感神経値- 個人中央値)/個人標準偏差

【指標値 B】副交感神経活動指標：(副交感神経値-個人中央値)/個人標準偏差

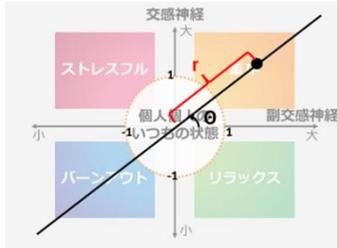
## 3 指標化したデータの取得

- ①計測したアカウント
  - ②計測した時間
  - ③交感神経活動指標
  - ④副交感神経活動指標
- の4つのデータを1分毎のバイタルデータとして抽出

datetime	副交感神経	交感神経指
2025/7/9 8:59	-0.89744	-0.37277
2025/7/9 9:00	-1.13186	-0.32491
2025/7/9 9:01	-0.59052	-0.08745

## 4 指標化したデータの分析

【図① 座標の算出】



交感神経活動指標/副交感神経活動指標から座標を算出(図①)し、心身状態の傾向として集計(図②)し、時系列に沿って図・グラフ化(図③④)した。

図③は表②心身状態の傾向を日ごとに割合化し、時系列に沿って示したものである。

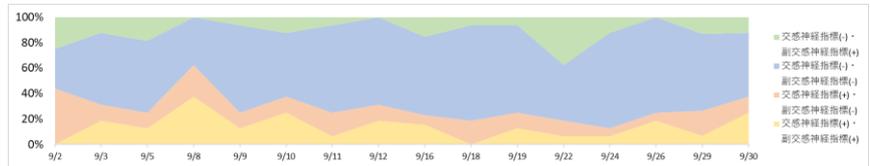
図④は図①の座標の位置を時系列に沿って示したものである。棒グラフは心身状態の傾向(Theta)の変化を、折れ線グラフは強度(r)の変化を表示している。

【解釈例： $\Theta = -45^\circ$ 、 $r = 1.2$ 】  
リラックス状態であるが、強度がやや大きい( $r > 1$ )のため「いつもよりリラックス状態」と推察できる。

【表② 心身状態の傾向(Theta)】

	億劫・憂鬱・無関心		やすらぎ・平穩	
	集中・興味	緊張・興奮	交感神経指標-・副交感神経指標-	交感神経指標-・副交感神経指標+
7/9	1	0	11	0
7/10	2	0	10	0
7/16	0	0	5	1

【図③ 心身状態の傾向の变化】



【図④ 心身状態の傾向(Theta)と強度(r)の変化】



※ストレスと自律神経との関連づけについては「山下分類」を参考にしたが、本取組では児童生徒の行動観察の記録を指標化したデータに重ねて活用したため、山下分類の理論と一致しているわけではないことに留意する。

※「健康経営支援サービス」は集中状態等を正確に反映することを保証するものではないため、本研究では指標を参考値として扱う。

### 【参考文献】

- ・西岡加名恵・石井英真・田中耕治(2015)新しい教育評価入門,有斐閣,13.
- ・布山美慕・日高昇平(2016)読書時の身体情報による熱中度変化の記述,Cognitive Studies,23(2),135-152.
- ・NTTPC コミュニケーションズ(2025)健康経営支援サービス標準提案書\_240712,13.
- ・吉岡学(2023)加速度計を用いた重度知的障害のある自閉スペクトラム症児の課題従事行動の把握-単一事例の分析から-.日本教育工学会論文誌,47(4),593-601.

## 小学部

# 本への興味や親しみを 生み出す読書活動

### 推進の方向性

読書や読み聞かせを通して、本に**興味や親しみ**をもったり、「楽しい」「おもしろい」などの気持ちを実感したりできるようにする。

### 1 学部の取組

#### ◇ 学部研究方針

個に応じた読書活動

読み聞かせや個人読書など、  
児童一人ひとりに適した読書推進  
の在り方を見つける。

特性に配慮した読書活動

読書活動の先事例を参考にしつつ、  
知的障害の特性に配慮した読書活動  
へと改善していく。

#### ◇ 具体的な取組

### おはなしタイム(朝の読み聞かせ)



毎朝、各クラスで絵本の読み聞かせを行っている。児童の様子を踏まえて、同じ絵本を1週間読んでいる。担任以外の教師が週替わりで読み聞かせに来ることで、選書や読み方の違いにより毎回異なった形で絵本と出会う機会を大切にしている。

### 読書活動を支える場所づくり



←おはなしひろば  
(絵本コーナー)

クラス文庫→



日常生活の動線上に興味のある本があることが大切であると気づき、児童の行動範囲から見える場所に本を配置した。蔵書数確保の為、本の寄贈を保護者に呼び掛けたり、近隣の図書館から借りた本の開架を行ったりした。

### どくしょノート



金沢市で配布されている『親と子の読書ダイアリー』を参考に、簡易な読書記録を作成した。記録を通して、読んだ本を視覚的に残すことで児童自身や教師が好みを把握したり、保護者の方と取組を共有したりすることを目指した。

## 2 学習の様子（児童 A をモデルケースとして）

### ◇ 実現したい姿

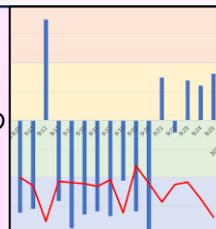
読んだ本についての発言ややりとりが増える。

### ◇ 取組の実際（実施・評価・改善）

事例児童 A は興味や親しみのある絵本に対して注目したり、絵本の内容に触れて独り言を言ったりすることがある。個人で読書を楽しむ姿を認めつつ、更に本に興味や親しみをもってもらうために、教師と本を介したやりとりが増えることを目指した。

#### 【1学期】実態把握の結果と改善

学部全体で毎朝おはなしタイムに取り組んできたが、絵本を見ずに指先を見て触る動作や、脈波の計測データの交感神経活動指標/副交感神経活動指標の強度が低い状態が継続しているため、実態に合った選書や読み方ができる小集団での読み聞かせが適しているのではないかと考えた。



#### 【2学期前半（9月～10月中旬）】

2学期はクラスごとにおはなしタイムを実施した。1学期と比較し、脈波の計測データの交感神経活動指標/副交感神経活動指標の傾向には変化が見られないが、読み聞かせ中の事例児童 A のつぶやきを拾って教師が応答すると、嬉しそうに笑う様子が繰り返し見られた。特に意外性のある絵本（ありえない展開、ナンセンス絵本等）に発言が多かった。発言ややりとりが増えそうな選書や読み方を学部研究会で共有し、発問したり、発言を拾ったりしていく読み聞かせを続けていくことにした。



#### 【2学期後半（10月下旬～）】

『はっきよい畑場所』（かがくいひろし、講談社）の読み聞かせでは、絵本の内容に合わせて実際に相撲をとると、絵本の内容に反応して話す姿が増えた。経験とリンクさせたり、関わり合いながら読み聞かせを行ったりすることで、事例児童 A が本を介して関わりの楽しさに気づき、実現したい姿に近づいていく可能性を見出した。



## 3 取組の成果と課題

取組を続けてきた中で、自然と絵本を手にする児童の事例が複数挙がるようになった。各事例の共通点として、読み聞かせ等で一度読んだ後に自ら手に取っていることから、教師が授業で扱った本を児童が自ら手に取れる場所に置くことが、新たな本との出会い（広がり）や、一冊の本と対話する時間（深まり）を生むことにつながると考えられる。今年度はクラスごとに改善を進めることで、クラスの状況に合わせた読書活動（回し読みをする、やりとりを重視して読み聞かせをするなど）を検討してきたが、一人ひとりにとって適した読書活動を見出す段階には至っていない。良い取組例を研究会等で共有し合うことで個別性を高めていくことが課題である。

## 中学部

# 他者とのつながりを 大切にした読書活動

### 推進の方向性

読書活動に取り組む中で「知りたい」「楽しみたい」という気持ちを広げ、「いいな」「なるほど」と感じたことを互いに伝え合いたくなるように促す。

### 1 学部の取組

#### ◇ 個に応じた読書グループの編成と本との出会い方

生徒の本への関わり方を教師間で話し合い、個に応じた4つのグループを編成し、朝の読書活動の時間を設定した。それぞれのグループで本との出会い方や読書方法について検討と改善を行った。

#### 興味・関心を広げる本や 興味・関心を深める本の提案



授業や宿題で用いた本や行事に関連する本などを月ごとに交換したり、図書委員会として取り組んだりした「おすすめの本紹介」がきっかけで、児童書や詩、新聞、科学の本など、さまざまなジャンルの本を手にする様子が見られるようになった。特に学習や行事に即した本については教師に内容や感想を伝えるなど、関心が高い様子であった。

#### 選書の際の配慮



- ・ 身体経験や生活経験に結びつきのもの
- ・ 生徒が楽しむことができる文章量
- ・ 絵本の挿絵と文章の構造

#### 他者につながるツールの1つとしての読み聞かせ



絵本を介した関わりを通して、絵本の楽しさを教師や友達と一緒に味わい、さまざまな着眼点や考え方を知り絵本に親しみをもった。

- ・ 同じ本を繰り返し読み聞かせることで内容に見通しをもって楽しむことができる。
- ・ 生徒が楽しめる教師が予想したものと実際に興味を示した絵本やページが異なることもあるため、1度読み聞かせてみて反応を確認しながら読み聞かせする本や読み方を調整する必要がある。

## 2 学習の様子（事例生徒 B をモデルケースとして）

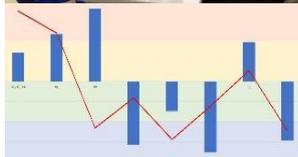
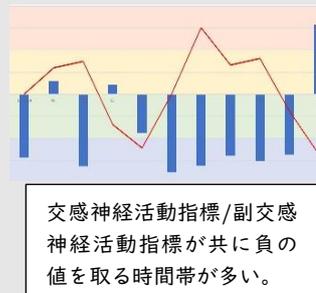
### ◇ 実現したい姿

- ① 好きな本やページを見つけて本に親しみをもつ。
- ② 絵本の内容についてやり取りや発言をする場面が増え、他者と一緒に本を楽しむ。

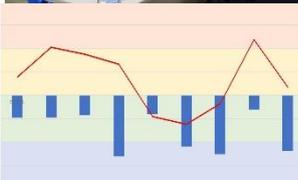
### ◇ 取組の実際（実施・評価・改善）

#### 【取組前の生徒の様子】

文章を読んで内容を理解することに困難さがあり、絵本を読んでその内容について自ら発言したり行動したりすることは少ない。また、自分から好んで本を手取る様子は見られなかった。普段から周りの様子を見て行動したり発言を真似したりすることが多い。読み聞かせにおいても同様の様子が見られ、本に注目することはあるが、ぼんやりしていたり、独り言をつぶやいたりすることがある。



本人が理解できるペースに合わせて挿絵や言葉を部分的に動作化しながら読み聞かせをすることができるようになり、生徒2名の読み聞かせグループにした。また、事例生徒Bの興味・関心のあるものについて中学部の教師に聞き取りを行い、読み聞かせをする絵本を選定した。気に入った本は読み聞かせ前にも自ら手をのばすようになり、交感神経活動指標/副交感神経活動指標が正の値を取る時間帯が増加した。



読み聞かせをした後に生徒自らが読書する時間を設けると脈波の計測結果に変化が見られ、交感神経活動指標/副交感神経活動指標が正の値を取る時間帯が増加した。一人で読書している際にも教師と読み聞かせと一緒にやり取りした「好きな食べ物のページで食べるふり」をする姿や、読み聞かせの中で見つけた「お気に入りのやり取りのページ」を教師に共有して一緒に行おうとする姿が見られた。また、朝の読書活動以外の時間にも本を自発的に手取る様子が増えてきている。

これらの結果から下記①②の時間をバランス良く組み、対象生徒に合う読書方法を提示した。

- ① 読み聞かせを通して好きなページや、やり取りを見つけて本に親しみをもつ
- ② 自分で選んだ本を自分のペースで読み進める

## 3 取組の成果と課題

朝の読書活動の時間を楽しみに各々の読書場所へ意欲的に向かう生徒が増えた。生徒が自然と本を手取る場面や読んだ本を話題として生徒同士で関わる場面が複数見られるようになり、学校生活においては本や読書が生徒にとって身近なものになってきていることが読書推進の成果として挙げられる。一方で、読書の様子を家庭へ情報発信する必要性を感じた。保護者アンケートに夏季休暇中の読書ラリーが好評な意見があったため、家庭と連携した取組を増やしていくことで改善につなげたい。

## 高等部

# ちょっとしたきっかけや 目的意識からつながる読書

### 推進の方向性

本に対する自分の好みや、自分にとって最適な向き合い方に気付くことを促し、自ら生活の充実を図ろうとする態度を養う。

## I 学部の取組

### ◇ 生徒の実態（本への関わり方）を踏まえた本との出会い方

高等部では、生徒によって本の選書や良さや楽しさの実感、読書方法は異なるのではないかと捉え、より効果的に本に親しむことができるように、生徒にとってよりよい読書環境を模索した。

### 生徒の実態 （本への関わり方） に合わせたグルーピング

生徒の本との関わり方を教師間で話し合い、4つのグループを編成し、各グループで本との出会い方について検討した。また、生徒の様子に合わせて柔軟に別グループへの変更も検討した。

### グループごとに 本との出会い方や 読書方法の検討と改善

様々な本と出会う中で興味・関心を広げたり、好きなジャンルの本を深めたりすることや、読書方法（一人、または複数人等）の選択を通して、自分に合った本との向き合い方を生徒本人が見つけることができるように、検討と改善を行った。

### I グループ

#### 自力で本を楽しめそう①

おすすめ本を紹介し、コメントを出し合う活動を通して、本の内容への興味・関心を深めていった。



### II グループ

#### 自力で本を楽しめそう②

推薦本をさりげなく配置し、隣で読む友達や教師との関わりを通して自分が読みたい本を模索した。



生徒の実態に合わせ本を選定し、本の内容を話題にした教師との関わりを増やしていった。



### III グループ

#### 読み聞かせが向いていそう

生徒の興味・関心に合わせ本の選定を行い、読み聞かせを行った。



### IV グループ

#### 簡単な読み物の 読み聞かせが向いていそう

## 2 学習の様子（事例生徒 C（Ⅲグループ所属）をモデルケースとして）

### ◇ 実現したい姿

身近な人とコミュニケーションを楽しむ手段として、本を活用する。

→①自ら読みたい本を選ぶ。②本を話題に、話したい人と関わる。



### ◇ 取組の実際（実施・評価・改善）

#### 生徒 C の様子

繰り返し読み聞かせした絵本は他の生徒の様子に合わせ、絵本の特徴的なフレーズを話す。



#### 教師の見取り・動作の記録

- ・フレーズ以外の場面は興味・関心がなく、内容理解が難しそう。
- ・6人程度の集団では挿絵が見えないのではないか。

#### 脈波データ

- 【改善点】
- ・文章量が程よい絵本を選書する。
  - ・読み聞かせの最中に教師と絵本の内容について会話する時間を設ける。
  - ・グループを2～3人程度に変更する。

絵本に関するつぶやきが出た。教師と絵本の内容と自身の経験を結びつけて会話する。



- ・内容理解が難しく、単語で想起できたことからなんとか想像しているのでは。
- ・教師が呼名や質問をすると、視線を前に向ける。

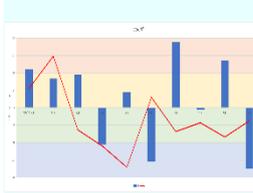


- 【改善点】
- ・文章が少なく内容が理解しやすい本や生活経験と結びつく絵本を選書する。
  - ・生徒が本を選び、誰と一緒に読みたいかを尋ねる。

「先生ゴーヤは好きですか」など絵本の内容と自身の経験に即して周りの教師に話しかける。教師と一緒に読もうと呼びかけると教師と一緒に読むようになる。



- ・絵本を楽しむより教師との会話を楽しみに読書の時間を過ごしているようだ。
- ・視線が絵本へ向くようになった。しかし、内容が簡単すぎる絵本では視線がそれている。



実現したい姿①について、生徒 C は教師と読みたい絵本を選べていた。しかし、読んだことのある絵本を選ぶ傾向も見られ、選書の広がりや深まりを促していく上では課題が見られた。そのため、生徒の生活経験を考慮しながら、教師がおすすめの本を提案し、その中から自分で選ぶ活動を取り入れるなど、工夫していきたい。②について、教師との会話を楽しんでいることから、生徒 C にとっては有効であり、本を読む目的になっていたと考えられる。また、会話のきっかけとなるのは生活に結びついた内容であることから、生活経験と本の結び付きは重要であると考えられる。

## 3 取組の成果と課題

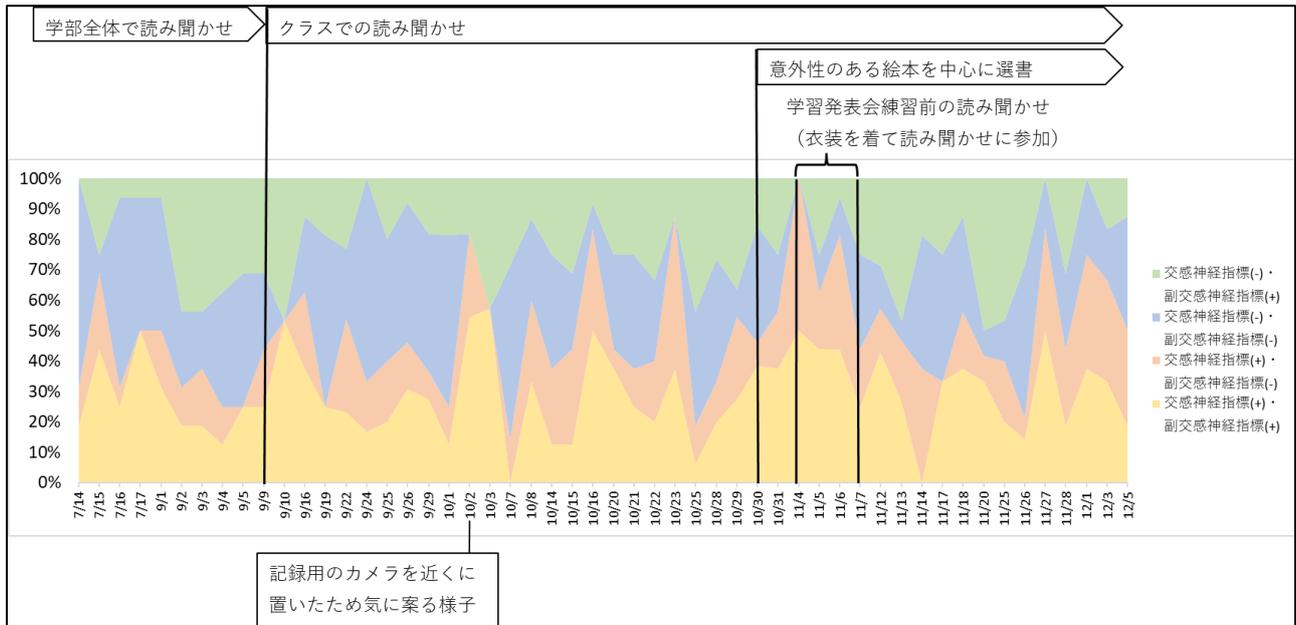
生徒が本に対する自分の好みや、自分にとって最適な向き合い方に気付くことを目指して取り組んだ。生徒の本との向き合い方や読書への興味・関心、読書量には、教師からの本の紹介や促しだけでは劇的な変化は見られにくかった。しかし、友達が読んでいるなどのきっかけや、友達や教師に紹介するためといった目的意識があると生徒は新たな本へ手を伸ばす様子が見られた。また、少しずつ変化が見られたエピソードもあった。例えば、図書館へ自ら行って本を借りたことや、本を誰かと読みたいと発言したことである。一度きりだった場合もあるが、このような小さな変化が今後も読書を継続することで、生徒の中で読書が生活の一部になり、卒業後の余暇時間に選択肢のひとつとして読書が根付いていくことを期待する。

## 結果・考察

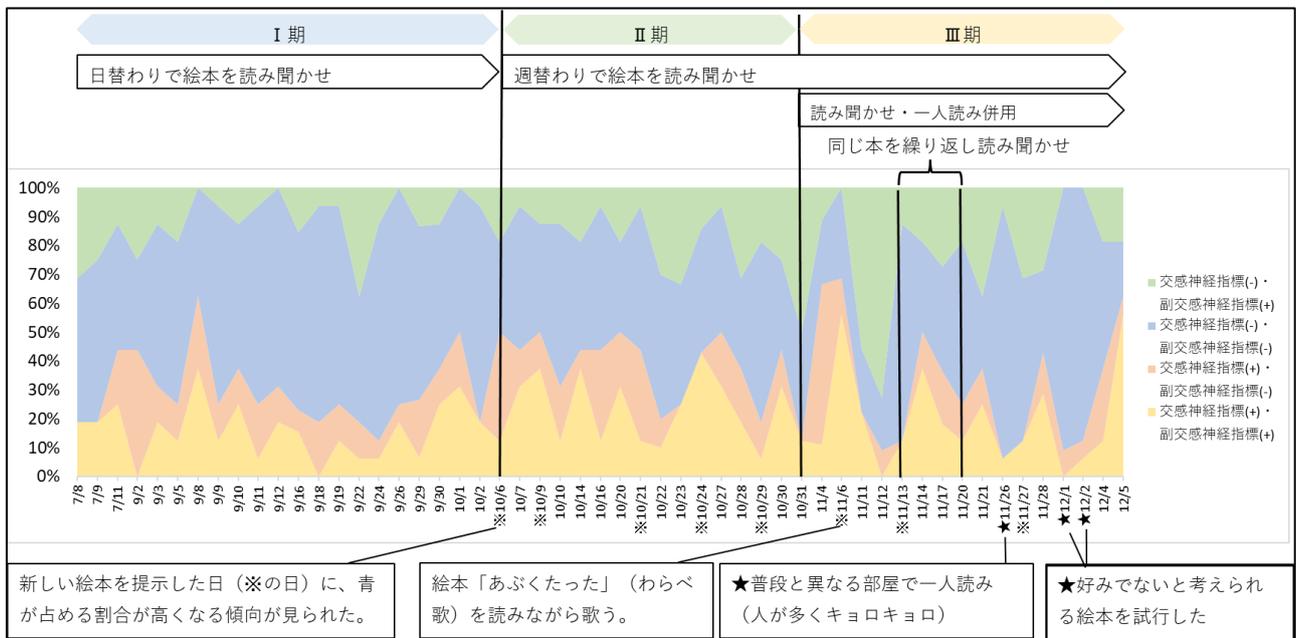
### ◇ 行動観察・身体情報（身体動作の観察・脈波の計測データ）

1分ごとの交感神経活動指標と副交感神経活動指標をそれぞれ正の値と負の値に分け集計し、日ごとの割合で示したものを時系列で示したものが下の図である。この図に行動観察と身体情報とを重ねて考察を行う。

### ○ 小学部事例児童 A（読み聞かせを実施した 9:10~9:25 のみ抜粋）

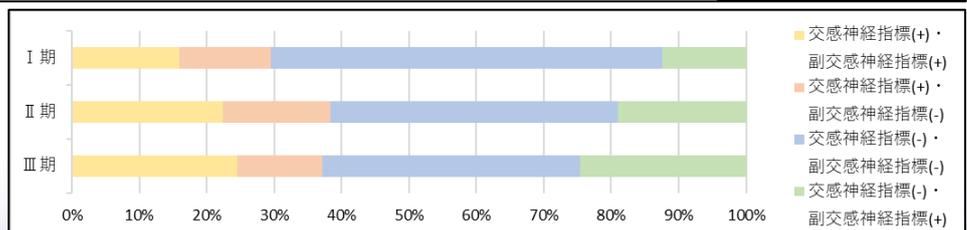


### ○ 中学部事例生徒 B（読み聞かせ・読書を実施した 8:55~9:10 のみ抜粋）



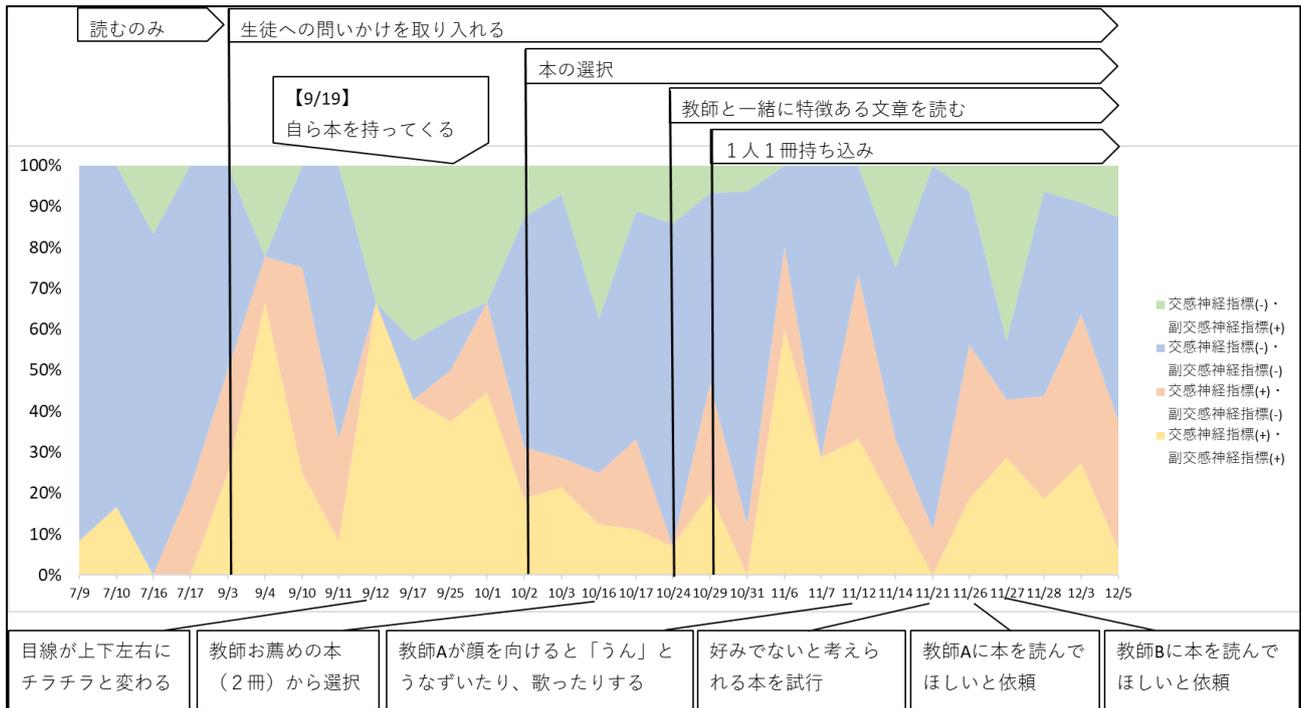
#### 期別の割合

2つの指標が負の値をとる割合（図中の青）が低下した。



※取組の方針と異なる状況・環境で行った日(★日)は除外して集計

○ 高等部事例生徒 C (読み聞かせ・読書を実施した 8:55~9:10 のみ抜粋)



行動観察と脈波の計測データを重ねて分析した結果、読書活動に興味・関心を示したと考えられる日時には、交感神経活動指標/副交感神経活動指標がそれぞれ正と負の値を行き来していた (図中の4色が適度に混在した状態)。また、行動観察と身体動作の観察を重ねて分析した結果、読書活動に興味・関心を示したと考えられる時には姿勢は前傾で顔を本・読み手(教師)に向けている状態であった。

上記2点の状態を本に興味・関心を示した状態であるとし、その状態が表れるよう学部研究会において取組の評価・改善を繰り返した。その結果、主に①読書を行う集団を児童生徒のニーズに応じた集団<sup>1</sup>に調整すること、②児童生徒の興味・関心や身体経験・生活経験がある本を教師が目星をつけ、教師の提案を支えに読書・読み聞かせをする本を選択・決定する機会を設けることで、事例児童生徒は興味・関心が薄い状態(図中の青)から調和がとれた状態(図中の4色)に変化し、また本・読み手に顔を向け読み手とのやり取りを楽しむ姿が見られるようになった。

一方、読み聞かせで繰り返し取り上げた本であっても、一人読みでは興味・関心を示していると考えられる姿・データが見られなくなることがあった。また、文章が易しいものや場面の展開が少ないものなど、一見児童生徒が理解して楽しめそうな本であっても、身体情報から興味・関心の高まりが見られないケースがあった。このことから、内容理解を促す取組・工夫のみで児童生徒の興味・関心を高めることは難しいことが明らかになった。

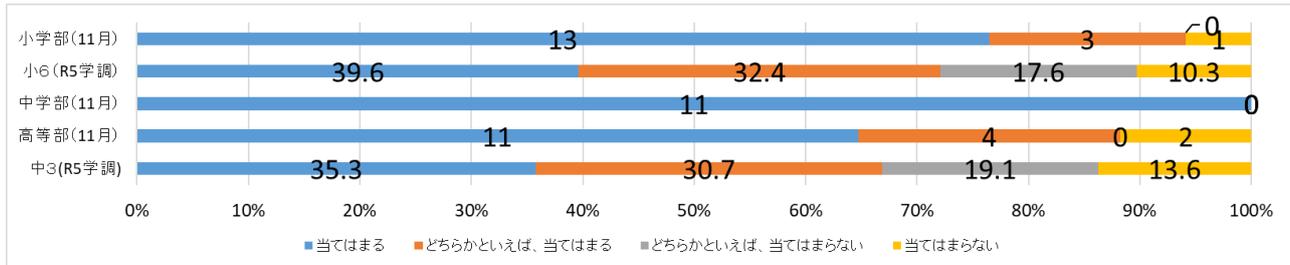
<sup>1</sup> ここでの「児童生徒のニーズに応じた集団」は発達段階や学習状況に応じた集団ではなく、読書に係る実態把握を基にした本への向き合い方・本へのニーズのことを指す。

## ◇ アンケート調査

取組の評価を行うため、児童生徒・保護者・教職員を対象にアンケート調査を行った。アンケートの内容は令和5年度全国学力・学習状況調査を参考に作成し、同年代の児童生徒の結果と比較することで本校児童生徒の状況や特徴を把握した。また、保護者・教職員を対象にしたアンケートについては取組前後の結果を比較することで、取組の効果や課題を把握した。（全調査結果については右二次元コードに掲載）

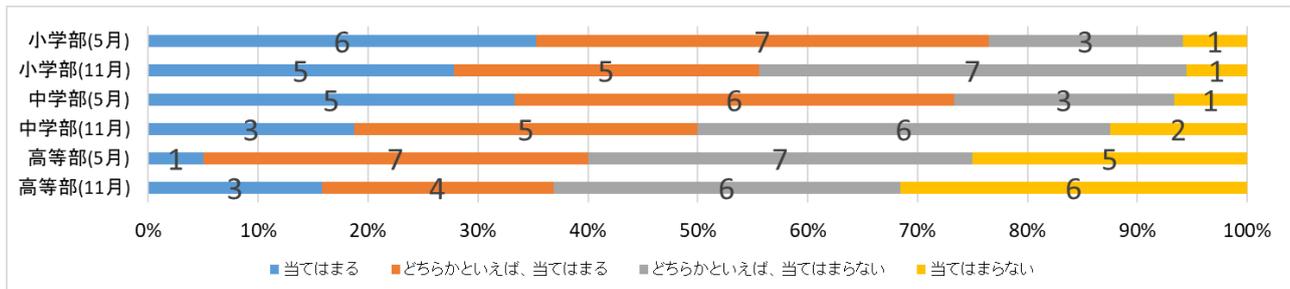


### ① 児童生徒アンケート（「Q 読書は好きですか。」）

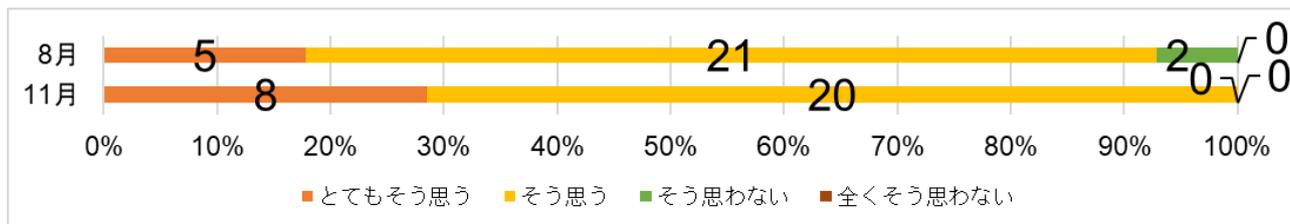


※令和5年度全国学力・学習状況調査の値は割合（％）を示す。

### ② 保護者アンケート（「Q お子さんは読書（読み聞かせを含む）が好きですか。」）



### ③ 教職員アンケート（「Q 活動前と比較して、読書・読み聞かせ（児童生徒理解を含む）について理解が深まったか。」）



児童生徒の結果から、読書に対して肯定的回答が多く、同世代の児童生徒よりも高い割合であるが、保護者の結果との間に乖離が見られた。

保護者の結果から、読書に対して肯定的な回答割合が減少したが、自由回答では肯定的なエピソードが多数であることから、取組によって読書に対する状況（現状）を正確に把握した結果であると考えられる。

教職員の結果から、読書に対する理解が深まると共に、児童生徒の適切な実態把握に基づく指導改善を図ることができた。自由回答によるエピソードを分析すると、児童生徒一人ひとりにとって適した取組の推進など、学校図書館の機能<sup>2</sup>として示されている読書センターとしての機能を十分に活用できた一方、学習センター・情報センター機能の活用については不十分さが見られた。

<sup>2</sup> 学校図書館の主な機能として「学校図書館ガイドライン」では①読書センター、②学習センター、③情報センターが挙げられている。

## ◇ 各学部を取組・評価より

各学部の取組が読書活動の効果を高めることにつながったこと背景には、自己決定理論の土台として位置付けられている基本的心理欲求理論に示されている生得的な心理的欲求（①コンピテンスへの欲求、②自律性への欲求、③関係性への欲求）（鹿毛,2013）を充足・促進したことが挙げられると考える。とりわけ、本研究で効果が見られた取組の工夫として、以下の3点を示す。

### 1 身体経験・生活経験との結びつきのある選書（①コンピテンスへの欲求の充実・促進）

児童生徒の選書や興味・関心を示した本の特徴を分析したところ、身体経験や生活経験に結びつきのある本を選ぶ傾向が見られた。これは、身体経験や生活経験に結びついていないテーマ・内容のものはイメージをもちにくく、児童生徒の選書につながらないのではないかと推察される。

このことから、児童生徒の身体経験や生活経験との結びつき（学校行事・学習内容・学校外での余暇活動など）を考慮して選書すると共に、豊かな身体経験や生活経験を得られる活動を設けていく必要がある。

### 2 読書をする目的の設定（②自律性への欲求の充足・促進）

児童生徒の行動観察・身体情報の分析から読書をする目的を明確にすることで、読書に価値を感じながら本に向き合う姿が見られた。この姿を自己決定理論（有機的統合理論）に重ねると、例えば「環境問題に詳しくなりたい」「幼児に読み聞かせを楽しんでもらいたい」といった目的をもった読書は外発的動機づけに基づくものであるが、読書が自分にとって意味のあるものと捉え、自分の価値観や考えと行動（読書）が一致した状態であると考えられる。

### 3 他者とつながる・関わるツールとして活用（③関係性への欲求の充足・促進）

本校の児童生徒の行動観察から、読み聞かせがコミュニケーションのきっかけとして大きな役割を果たしていることがわかった。これは、高橋・首藤（2005）が絵本の読み聞かせの効果として「絵本の楽しさを友達と一緒に味わい、友達が感じたことを刺激として受けて楽しむ。いろいろな感じ方を知り、友達と共感し、共通のイメージをもたせ、次の遊びや生活を豊かなものとしていく。」としていることとも重なり、他者とつながるツールの1つとして読み聞かせは有効である。

## ◇ 今後の展望

児童生徒が読書において「なぜ（動機）」「どのように（方法）」「何を（行動）」「誰と」を決めることに関与することを繰り返すことで、児童生徒が自身の「好み」を理解し、「好みに合った選択」ができるようになることを考える。このことは「自分なりの読書法」の獲得とも言うことができ、この「読書法」を獲得するためにも自己決定理論を土台とした指導計画の作成、活動の展開を行っていきたい。

#### 【参考・引用文献】

- ・鹿毛雅治（2013）学習意欲の理論 動機づけの教育心理学.金子書房.184-185.
- ・高橋順子・首藤敏元(2005)幼児教育における集団での絵本の読み聞かせ, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要.165-176.

**Webで寄附申込ができます!!**

クレジットカード、インターネットバンキング  
コンビニでのお支払いも可能

(申込 URL) [https://kikin.adm.kanazawa-u.ac.jp/  
kikin/contents/formkojin.php?fund\\_id=23](https://kikin.adm.kanazawa-u.ac.jp/kikin/contents/formkojin.php?fund_id=23)

申込はこちら



## 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属学校園の 教育活動充実のためのご寄附のお願い

日頃より金沢大学人間社会学域学校教育学類附属学校園に対し、ご支援、ご協力を賜り、深く感謝申し上げます。

幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校と5校園を擁する本附属学校園は、そのスケールメリットを生かし、各校園独自の取組に加え、大学も含めた校種間連携・協働による、実践的課題解決に資する教育・研究活動に取り組んでいます。

また、先導的な教育モデルを提唱する教育研究機関として、「共通研究」、「先端技術・教育データの活用」、「社会イノベーション創造授業」を3本柱とした未来教育モデル〈金沢モデル〉の展開、附属小学校では、外国人児童適応指導学級（さくら）や通級指導教室（かしわ）を設置し、グローバル化・多様化が進む今、教育・研究の強化に努めているところです。

しかしながら、近年、国立大学をはじめ附属学校を取り巻く財政は大変厳しい状況であり、本附属学校園の教育・研究の更なる発展に資するため、保護者、卒業生及び関係各位の皆様からのご支援をいただきながら、教育環境等の一層の充実を図っていくことができればと考えております。

どうか本附属学校園の教育活動にご理解いただき、格別のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

なお、ご寄附していただいた方々には、税制上の優遇措置を受けることができますので、ぜひご活用いただければと存じます。

令和7年4月

金沢大学附属学校統括長 大村 雅章  
(人間社会研究域学校教育系 教授)

文部科学省読書活動推進事業 令和7年度研究報告書

研究主題：Society5.0を豊かに生きる資質・能力の育成～読書活動の推進を通して～

発行日：令和8年2月1日

発行者：金沢大学人間社会学域学校教育学類附属特別支援学校

校長 中澤 宏一

〒920-0933 石川県金沢市東兼六町2番10号

印刷製本：社会福祉法人石川サニーメイト サニーメイト福祉工場

(本報告書は障害者優先調達推進法の対象となる施設から調達しております。)